

森松講師 07 年過去問解答

以下の解答について、正しいという保障はできませんのでご了承ください。

1. おもりの質量が  $m$ , 糸の長さが  $l$  であるような振り子の運動を考える。おもりは、糸の張力によって、常に糸の支点  $O$  を中心とする半径  $l$  の円周上に束縛されている。

(1) 振り子の振れ角を  $\varphi$  として、エネルギー保存の関係式を表せ。

(解答)

$$\frac{1}{2}mv^2 - mgl \cos \varphi = E \text{ (const.)}$$

(2) 糸の長さが  $0.2 \text{ m}$ ,  $\varphi = 0$  のときのおもりの速度が  $1.4 \text{ m/s}$  であるとする。このとき、 $\varphi$  の取り得る値の範囲を求めよ。

(解答)

$$\begin{aligned} \frac{1}{2}mv^2 - mgl \cos \varphi &= \frac{1}{2}mv_0^2 - mgl \\ 0 \leq \frac{1}{2}mv^2 &= mgl \cos \varphi + \frac{1}{2}mv_0^2 - mgl \end{aligned}$$

$$\begin{aligned} \therefore \cos \varphi &\geq 1 - \frac{1}{2} \frac{v_0^2}{gl} \\ &= 1 - \frac{1}{2} \frac{1.4^2}{9.8 \times 0.2} \\ &= 0.5 \end{aligned}$$

$$\therefore -\frac{\pi}{3} \leq \varphi \leq \frac{\pi}{3}$$

(3) 振り子の振れ角  $\varphi$  が小さいとして、振り子の周期を求め、周期は、振り子の長さ  $l$  には依存するが、振動の振幅には依存しないことを示せ。

(解答) おもりが中心に戻ろうと働く力は  $mg \sin \varphi$  である。十分振れ幅が小さいとすると一次元運動で近似できて、

$$\begin{aligned} \frac{d^2x}{dx^2} &= -mg \sin \varphi \\ &= -mg \frac{x}{l} \end{aligned}$$

運動方程式よりおもりは単振動をして、角速度  $\sqrt{\frac{g}{l}}$ , 周期  $2\pi\sqrt{\frac{l}{g}}$ . よって周期はおもりの長さ  $l$  のみに依存する。

2. 時刻  $t = 0$  において、地表から初速度  $v_0$  で鉛直上方に物体を打ち上げる。

(1) この物体が地表から高さ  $z$  に到達したときの速度  $v$  を  $v_0$ , 地球の半径  $R$ , 地表における重力加速度  $g$  で表せ。但し、空気の抵抗は無視する。

(解答)

$$\begin{aligned} \frac{1}{2}mv^2 - G \frac{mM}{R+z} &= \frac{1}{2}mv_0^2 - G \frac{mM}{R} \\ v &= \sqrt{v_0^2 - 2gR \frac{z}{R+z}} \end{aligned}$$

(2) この物体が  $z = \infty$  まで到達できるための最小の  $v_0$  の値  $v_e$  を求めよ. 但し,  $g = 9.8 \text{ m/s}^2$ ,  $R = 6.4 \times 10^6 \text{ m}$  とする.

(解答)

$$\begin{aligned} 0 &= \frac{1}{2}mv_e^2 - G\frac{mM}{R} \\ mg &= G\frac{mM}{R^2} \\ \therefore v_e &= \sqrt{2gR} \\ &\approx 11.2 \text{ km/s} \end{aligned}$$

(3)  $v_0 = v_e$  の場合に

$$\frac{dz}{dz} = \sqrt{\frac{2gR^2}{R+z}}$$

が成り立つことを示し,  $z$  を  $t$  の関数として求めよ.

(解答)

$$\begin{aligned} \frac{1}{2}mv^2 - G\frac{mM}{R+z} &= 0 \\ \frac{dz}{dz} &= \sqrt{\frac{2gR^2}{R+z}} \\ z &= R^{2/3} \left( \sqrt{R} + \frac{3}{2}\sqrt{2gt} \right)^{2/3} - R \end{aligned}$$

(4) (3) で求めた  $z$  を  $t$  についての Taylor 展開の 3 次の項まで求め, その物理的意味を述べよ.

(解答)

$$\begin{aligned} \frac{dz}{dz} &= (2g)^{1/2} R^{2/3} \left( R^{1/2} + \frac{3}{2}\sqrt{2gt} \right)^{-1/3} \\ \frac{d^2z}{dz^2} &= -gR^{2/3} \left( R^{1/2} + \frac{3}{2}\sqrt{2gt} \right)^{-4/3} \\ \frac{d^3z}{dz^3} &= 2^{3/2} g^{3/2} R^{2/3} \left( R^{1/2} + \frac{3}{2}\sqrt{2gt} \right)^{-7/3} \end{aligned}$$

$$z(0) = 0 \quad \frac{dz}{dz}(0) = \sqrt{2gR}$$

$$\frac{d^2z}{dz^2}(0) = -g \quad \frac{d^3z}{dz^3}(0) = (2g)^{3/2} R^{7/9}$$

$$\therefore z = \underbrace{\sqrt{2gR}t}_{\text{等速による近似}} - \underbrace{\frac{1}{2}gt^2}_{\text{重力の 1 次近似/一様重力 } mg \text{ による近似}} + \underbrace{\frac{2}{3}g\sqrt{2gR}t^{7/9}}_{\text{2 次以上の重力の効果}} + O(t^4)$$

3. 質量  $M_0$  の機関銃に質量  $\Delta m$  の弾を  $N$  発込めて水平面上に置く. 弾は機関銃に対して相対速度  $u$  で,  $\Delta t$  の間隔で自動的に連射される. 連射速度は十分速く, 単位時間あたり質量  $k = \Delta m/\Delta t$  の割合で連続的であると見なせるとし,  $T = N\Delta t$ ,  $M_1 = N\Delta m$  とする. ( $k = M_1/T$ ) また, 機関銃が水平面を滑るときの摩擦係数を  $\mu'$  とする.

(1)  $n$  回目と  $n+1$  回目の発射直後の機関銃の速度をそれぞれ  $v_n, v_{n+1}$  とするとき,  $\Delta v = v_{n+1} - v_n$  は, 微小量について一次の近似で, どのように与えられるか. また,  $t = n\Delta t$  として, 機関銃の速度  $v(t)$  に対する微分方程式を導け.

(解答)

$n$  回目の発射後の機関銃の質量は,  $M_n = M_0 + M_1 - n\Delta m$  である. 運動量の変化と力積の関係より,

$$M_{n+1}v_{n+1} + \Delta m(v_{n+1} - u) - M_nv_n = -\mu' M_n g \Delta t$$

$$\Leftrightarrow (M_0 + M_1 - (n+1)\Delta m)(v_n + \Delta v) + \Delta m(v_n + \Delta v - u) - (M_0 + M_1 - n\Delta m)v_n = -\mu'(M_0 + M_1 - n\Delta m)g\Delta t$$

$$\Leftrightarrow (M_0 + M_1 - n\Delta m)\Delta v - \Delta mu = -\mu'(M_0 + M_1 - n\Delta m)g\Delta t$$

$$\therefore \Delta v = \frac{\Delta mu}{M_0 + M_1 - n\Delta m} - \mu'g\Delta t \dots\dots (\text{答})$$

$k = \Delta m/\Delta t, t = n\Delta t$  より,  $n\Delta m = kt$  なので,

$$\therefore \Delta v = \frac{\Delta mu}{M_0 + M_1 - kt} - \mu'g\Delta t$$

$$\frac{\Delta v}{\Delta t} = \frac{ku}{M_0 + M_1 - kt} - \mu'g$$

$$\therefore \frac{dv}{dt} = \frac{ku}{M_0 + M_1 - kt} - \mu'g \dots\dots (\text{答})$$

(式の途中で出てくる  $n\Delta m\Delta v$  は二次の微小量を含んではいるんですが,  $\Delta t$  が無限小である代わりに発射回数  $n$  が無限大(?) とみなせるので, 二次の微小量として無視はしない方が良いと思います (というか無視すると微分方程式が立てられません).  
あるいは  $n\Delta m\Delta v = kt\Delta v$  とすれば,  $n\Delta m\Delta v$  が実際には一次の微小量であることが分かります.  
もっと具体的に言えば, 数式上  $\Delta t \rightarrow 0$  という極限操作を行うときに,  $k = \Delta m/\Delta t, t = n\Delta t$  という二つの値を一定に保って考える必要があります.)

(2) (1) で導いた微分方程式を解くことにより, 時刻  $t$  における機関銃の速度  $v(t)$  を求めよ.

(解答)

$$\begin{aligned} \frac{dv}{dt} &= \frac{ku}{M_0 + M_1 - kt} - \mu'g \\ \int_0^v v dv &= \int_0^t \left\{ \frac{ku}{M_0 + M_1 - kt} - \mu'g \right\} dt \\ \therefore v &= -u(\log(M_0 + M_1 - kt) - \log(M_0 + M_1)) - \mu'gt \\ &= u \log \left( \frac{M_0 + M_1}{M_0 + M_1 - kt} \right) - \mu'gt \end{aligned}$$

(3) 弾を撃ち終えたとき, 機関銃はどれだけ移動したか.

(解答)

$kT = kN\Delta t = N\Delta m$  に注意して,

$$\begin{aligned} \frac{dx}{dt} &= u(\log(M_0 + M_1) - \log(M_0 + M_1 - kt)) - \mu'gt \\ \therefore x &= \int_0^T \{u(\log(M_0 + M_1) - \log(M_0 + M_1 - kt)) - \mu'gt\} dt \end{aligned}$$

$\int \log x \, dx = x \log x - x + C$  だから,

$$\begin{aligned} x &= \left[ u \log(M_0 + M_1)t + \frac{u}{k} \{(M_0 + M_1 - kt) \log(M_0 + M_1 - kt) - (M_0 + M_1 - kt)\} - \frac{\mu' g t^2}{2} \right]_0^T \\ &= u \log(M_0 + M_1)T + \frac{u}{k} \{M_0 \log M_0 - (M_0 + M_1) \log(M_0 + M_1) + M_1\} - \frac{\mu' g T^2}{2} \end{aligned}$$